

日土比較文化考

一人気ドラマの内容分析(1)ー

Mariko KIZILAY

はじめに

拙稿(2009a, 2009b, 2009c)では、日本とトルコの諺および慣用句を題材に対照研究を行った。本稿ではより現代社会の姿を反映すると思われるドラマを題材に、その内容分析を行い、トルコの社会背景や人々の価値観、および日本との比較文化考察を行う。

岩男は、分析対象に数多くあるテレビ番組の中でも、送り手と受け手の意識や文化、国民性、社会心理や社会状況、送り手の意図などを総合的に反映する度合いが比較的大きいと思われる虚構の世界である「ドラマ」に焦点を当てている。長期間にわたる分析をすることで、日本のテレビドラマの特徴、時代の流れに伴う社会心理や価値観の変化が多角的に捉えられるとしている¹。また阿部は、テレビドラマの物語の構造がいかに変化していくかを観察することにより、大衆文化上に現れる時代精神の変容の過程が明らかとなり、視聴者(大衆)の無意識の領域を探ることが可能になるという²。

本稿で取り上げるドラマ『Adını Feriha koydum フェリハと名付けた』(監督:Fatih Aksoy、制作会社: Med Yapım、本稿では以下『フェリハ』と略称する)は、2011年1月から、2012年6月まで Show TV で放送された恋愛ドラマで、2シーズン67話³からなる。トルコのドラマは視聴率の影響を受けることが多い。人気ドラマは1シーズンで終わらず、夏休みを挟んで2シーズンとなったり、視聴率が振るわないドラマは、途中で放送中止となることもままある⁴。『フェリハ』が2シーズン続いたことは、人気があったことの証の一つである。また、このドラマはトルコ国内に留まらず、周辺諸国をはじめとする諸外国で広く放送された⁵。

1. 『フェリハ』のあらすじ

アパート管理人の家に生まれた娘(フェリハ)が、金持ちのプレイボーイ(エミル)の目に留まり、ありのままの自分をさらけ出す勇気がなく、自分の出自、親の職業を偽り交際をはじめ。時を同じくして、エミルは義弟の事故の報を受け、故障した高級車の修理を名も知らぬ自動車修理工に委ね、病院へ駆けつける。この修理工が誘惑に負け、ほんの一夜だけと、雑誌で見た夢の高級車に試乗した結果、大事故を起こし、多額の損害賠償金

を請求される。この修理工がフェリハの双子の兄⁶であったことから、フェリハの苦悩は重くなっていく。やがて、真実の姿が明かされ、双方葛藤を繰り返しながらも、周囲の反対を乗り越え、愛を貫く。しかし、結末はハッピーエンドではなく、結婚式でフェリハは銃殺されてしまう。

2. 物語の構成と主要登場人物

『フェリハ』は、「貧一富」「下流階層—上流階層」「保守派—世俗派」「イスラム—西欧志向」という対立軸のもと展開する。保守派の代表がフェリハの父親であり、世俗派の代表が、エミルの父親や彼の周囲の友人たちである。フェリハの母親はその間に位置し、その中庸をとろうと奮闘する存在といえる。

2.1. フェリハの父親ルザ

ルザは、富裕層の住むアパートの住込み掃除夫兼管理人 (kapıcı カプジ) である。カプジは通常アパートの最下階 (半地下等) に家族とともに住み、朝は各戸を回って御用伺い、朝食のパンや新聞等の配達、ゴミ出し、共有部分の清掃、雑用等を行う。カプジのアパート玄関口には、上階住民各戸からの呼び出しブザーが備え付けられ、御用がかかれば、すぐに応答せねばならない。

ルザは保守派あるいは貧困層の象徴として描かれる。敬虔で、厳格、かつ勤勉なイスラム教徒で、自らの責務を堅実に果たすことに重きをおく。娘には教育よりも貞操あるいは家族の名誉を守ることを第一義とする。よく口にする語の筆頭は、「namus 名誉、誇り」「kader⁷ 運命、宿命」「onur 自尊心、名誉」である。また「生まれ持った運命は変えられない」は、よく子に諭すときに使う常套句である。

ルザは、貧困層のただ敬虔で頑固なムスリムとしてだけでなく、カネの有無に左右されず、金銭至上主義に屈しない人物像としても描かれる。また噂話には耳を傾けず、自らも噂話を口にするのではない。ルザが最も大切にしているものは「誇り・自尊心」である。息子の起こした自動車事故の借金返済のため、唯一の不動産である共同名義の田舎の土地売却を決断する際、ゼヘラが「自分たちにあの土地以外の何があるの?」と詰問すると、ルザは「自尊心がある」と答える (第2話)。

これは、フェリハとエミルの関係を容認できなかった理由にも相つながる。ルザは言う。「父を恥じ、父の職を偽り、数々の嘘を重ねて、踏みにじった父の誇りをおまえは決して救うことはできない。」「おまえの家族はこれからは夫だけだ。」(第52話)「フェリハは自分たちのことを卑しむべき、軽蔑すべき存在と蔑む人々の姓を得るために結婚した」(第54話)。「カネが無くても誇りをもって生きていく」。それが、父の生き様であった。「誇り」と表裏一体で、人からの施しは断固として撥ねつけた。たとえ借金地獄に陥っても決して変わることはなかった。

2.2. フェリハの母親ゼヘラ

ゼヘラは、富裕層に雇われ日給で働く掃除婦である。自らが体験した保守的田舎の生活から、保守派の生き方すべてを受け入れることはできない。十分な教育を受けられず、周囲の反対で最愛の人とも結ばれなかったゼヘラは、娘には自分と同じ道（運命）を歩ませたくないと考える。「教育を受けることで人生は変わる」「人は自らの人生を切り開くことができる」「自らの願望を恐れるな」と子に諭す⁸。母の思いを受け継いだフェリハは一心に勉強し、有名私立大学に奨学生として入学する。

他人に依存しない生き方を望む点では、フェリハの父母の思いは同じである。カネはなくても、他人に頭を下げて、施し、恵、哀れみは受けたくない。この両親の思いは子にも受け継がれる。

2.3. エミルの両親

エミルの父親は高級ナイトクラブのオーナーで、夜の世界の帝王の異名をとる。不倫が原因で、エミルの母親とは離婚している。毎夜、若い女を連れて、プライベートライフを楽しむ。カネですべてが解決すると考える。人をその所有物により判断する傾向がある。

エミルの母親が息子の相手として重要視するのは「同じ階層、父親の職業、居住地」である（第53話）。階層とは「社会的、経済的地位がほぼ同じ程度の人々の集団。職業・収入・財産・学歴・年齢などが基準となって、格づけ・識別される」⁹ものであるならば、フェリハはその格付けでは当然排除される存在であった。父親が、富裕層の住むアパートの住み込み管理人であったため居住地から、また上階住民のジャンスのお下がりの高価な服を身に着けていたため、富裕層の娘と誤解されたに過ぎなかった。

3. 理想の家族像

有名私立大学に奨学生として入学したフェリハは、自らの出自や家族の真の姿を恥じ、告げられない。周囲が勝手に誤解した結果、虚偽の家族像が作り上げられていく。自らが端を発した虚偽ではなかったが、誤解を解かず虚偽を自らも受け入れてしまった結果、偽りの世界と現実の世界の間で苦悩する。第14話でフェリハは「アパート管理人の娘ではなく、ただフェリハでありたかった」と母に叫ぶ。

虚偽の世界はエミルの誤解に起因する。彼自身、不幸な家庭環境から、理想的な家族像を描いた結果でもあった。しかし皮肉にもその虚偽の家族は、見せかけの幸せ家族であり、実情は、常に不在の父親、子連れ再婚した継母サネムは外見を気にし、継子ジャンスとの関係が不和な家族であった。しかし外からはホテルオーナーの父親、若く美しい母親、結婚記念日をとともに祝う幸せ家族であった。フェリハがその偽りの家族の娘になった「夢」の世界を受け入れる一方で、エミルも彼の描く幸せな家族像を投影してフェリハの幻想家族を作り上げ、羨望のまなざしで見っていたといえる。やがて、フェリハの現実の家族、サネムの真の姿が明らかになり、幻想家族は崩壊する。

ただ「自分」でありたかったのはフェリハだけではなかった。エミルもまた、常につきまとう「サラフォールの息子」という姓の抑圧から逃れ、ただ一個の自分でありたかった。5歳で母とともに父の浮気現場を目撃し、母はエミルを連れて家を出る。その後、子連れ再婚した相手が母の妊娠を機に、エミルを拒絶。結局、母はエミルを諦め、エミルは父に引き取られることになる。このときエミルは10歳であった。その後、自分の姓を告げれば拒否する女はいないと豪語する父親のもとで育つ。父は信用できず、母にも裏切られた幼少期の体験は拭い難いものであった。心安らぐ居場所がなく、信頼感も得られず、孤独な子供時代を過ごしたエミルは、フェリハに出会い、彼女と家族の固い絆にいつしか心を動かされていく。たとえ「怒り、憤慨」であったとしても、フェリハの家族は固い絆でつながっていた、とエミルは述懐する（第56話）。

4. 『フェリハ』の社会的背景

フェリハが「ケータイは今ももう、ただ話すために使わない。サインのようなものだ」（第1話）と反論するシーンで、母ゼヘラが「以前は、その人がどんなことを言ったかで判断した」とつぶやく。またフェリハが「何も持っていない人間（自分）を（エミルは）信頼してくれるだろうか」（第1話）とつぶやく。現在のトルコが、その所有物により判断される社会となっている背景が反映されたセリフである。

イスラム教に対する畏怖の念が希薄となってきている状況も描かれる。フェリハの父ルザがモスクで礼拝中に財布を抜き取られる（第45話）。また、ともにモスクに行き礼拝をささげる男（ルザの事業パートナー）が、内面ではカネの亡者であり、甘い言葉で、隙さえあればカネを無心するなど、イスラム教徒という共通項でともにあった人々の価値観に亀裂が生じていることもドラマは映し出す。

高級車を乗り回す若者がいる一方で、今日食べるパン代を稼ぐため、街角で列をなす男たちの姿も描かれる。運よく、日雇い労働者を求めに来たトラックの荷台に乗せられ向かう先は、建設現場や荷物運び、引越業などである。

フェリハの小学生の弟が、学校前で違法に麻薬を売る男から、「単なる薬」と信じて麻薬を買う事件（第35話）では、都会の誘惑、悪への誘いの危険性があることが描かれる。この事件をきっかけに、母ゼヘラは、あれほど忌み嫌っていた故郷の田舎に、末息子を連れて戻る決意をする。「もう息子を運命に委ねることはできない」と言う。都会で生活する限り、魔の手は襲ってくる。「この都会に罪はない。しかし、夫の怒り、私の憤り、私たちの欲望」がこの都会では付きまとう。もはや、この都会で息子を守り続けることはできない、と決意するのであった。

5. ドラマで描かれる母親像

ジャンスの継母サネムは「世代、学歴、文化によって人生は変わってくる。母性もこれらに関係する」と言う。それに対して、ゼヘラは次のように言う。「母たることは、頭です

ることではなく、心ですることである。カネ、文化、学歴などは、よき母親であるための十分条件ではない。私はいつも自分の心で、子を抱いている」(第8話)と述べる。トルコの伝統的な母親像をゼヘラが体現しているといえよう。ゼヘラは「子が過ちを犯したからといって、その子を軽視するようになることはない」とも言う。いつも子のそばにあり、過ちを含め何が起こってもありのままの子すべてを抱きしめ愛する。息子メフメットが多額の借金を負った後、父親は怒りをあらわにし、息子に対して冷淡になっても、ゼヘラは変わらぬ母性愛で息子を見守り、「決してあきらめるな」と励まし続ける。そして、借金返済のため、日中の家政婦の仕事に加え、夜も家族が寝静まった後、市場で売るジャム作りに精を出す。

また、ゼヘラが体現する「子を認める」という行為が、いかに重要であるかも推察できる。メフメットは多額の借金を負った後も自己嫌悪に陥ることがあっても、いつも支えてくれる「母のために」立ち上がることができた。その後、悪妻に左右されることにはなるが、過ちを母の心の支えで乗り越える。一方、ジャンスは、実母をなくした後、心からの母性で包み込んでくれる存在を失う。継母は頭で考える人物であったため、ジャンスの心の傷は癒えることなく、エミルに対する異常な執着愛をもったままドラマは進行していく。

6. 価値観の相違

6.1. 親子(母娘)関係

娘と親の関係について、ゼヘラは、「人は、(娘を)しめつけることなく、あるいは、ゆるめすぎることなく、愛することはできないのだろうか。その中間の愛し方はないのだろうか。」(第17話)とつぶやく。保守的な家庭の親は、娘の身を案じるあまり、自由を拘束しようとし過干渉となりがち、一方の、世俗派の親は服装、外泊、交友関係すべてにわたり寛容な態度を示す。しかし、その自由放任・不干渉が度を越して、子が真に必要とするとき(病気、事故、自殺未遂など)にさえも、身近にいない状況が描かれる。

6.2. 結婚観

二つの社会階層では、異なる結婚観がある。伝統的な保守派の家庭では、婚前交渉はもつてのほか、ひとたびそのような過ちを犯した娘には、勘当か、その相手との結婚を強要する。一方の欧米よりの世俗派の家庭では、婚前交渉にも寛容で、たとえ妊娠という事態になっても中絶により決着をつける。『フェリハ』では、フェリハの従妹のギュルスンが前者のケース、学友のギュンジェが後者のケースとして取り上げられている。

伝統的な保守派の家庭では、結婚前の男女の付き合いも、婚約後はじめて可能となる。雑誌に掲載された写真が発端となり、父の独断でフェリハが婚約させられるのも、自由な男女の付き合いを阻止するためであった。父ルザがエミルに対して、「女と男は友人にはなれない。このことをよく覚えておいてくれ。(第44話)」というセリフにも明示される。

6.3. 女性の服装

イスラム教徒の女性はスカーフを被り、身体の線が出ない服装が推奨される。イスラムでは男性は誘惑に弱い生き物とされ、そのため、男性はむやみに女性を見つめないように、女性は必要以上に露出をして男性を刺激しないように定められているためである。つまり、「女性を守るため」の教えであり、本来、自由の拘束あるいは抑圧されたイメージで語られるものではない。

『フェリハ』では、管理アパートの上階に住む高校生の娘が、下校途中に痴漢に遭う（第20話）。友達3人とともにいたが、スカート丈がとりわけ短かかったのがこの娘であった。事件後、娘の母親が、今後は専属運転手を雇うと述べると、娘は、「猥褻な行為をする者から逃れるために戸外を自由に歩けないのか。周りに異常者がいるからといって、私たちが逃げないといけないのか。」と反論する。しかし、その一方で、自宅の若い家政婦が短いスカートを履いて父親の前を歩き来するのが気になる（第21話）。自分のことは棚に上げ、そのような行為をとれば、男性心理が抗えない現実があることも知っている。結局、父親がこの若い家政婦と浮気をしていたことが明るみに出、両親は離婚することになる。フェリハの双子の兄メフメットが、「妹のことは信用できるが、周囲の人間が信用できない」ゆえに、フェリハの服装について事細かに言うこととも繋がる。

7. ドラマの中の富裕層の特徴

トルコでは経済的な階層間格差が広がっている。『フェリハ』では、その顕著な一端を示しているが、決してすべてが架空の話ではなく、トルコの実情を垣間見させるものである。フェリハほどではないまでも、フェリハに近い心境の若年層は多くあろう。

ドラマで描かれる富裕層に特徴的な生活スタイルは、一部、欧米の生活スタイルの模倣といえる。家の中でも靴を脱がず、ベッド、ソファにも靴のまま寝そべる。両親は自由奔放、家族よりもプライベートな生活を楽しみ、子育てに無関心、家事一切は家政婦が行い、母は白魚のような手を一切汚すことはない。こういった富裕層では、父親の浮気等が原因で、両親は不仲、離婚に至っていることが多い。

ドラマの中の富裕層を象徴するものとして、外国語使用も挙げられる。「ありがとう」と礼を言うシーンで、フランス語の *Merci* を使う。これは、一種の優越意識から、上流階層に属する、あるいは属していると聞き手に思わせるためである。『フェリハ』にとどまらず、『Fazilet Hanım ve Kızları』（2017年-、Star TV）などにも、同様の使用例が多々見られる。

富裕層が貧困層を表して使う常套句は「kültür（文化）が違う」である。ここで使われるトルコ語の‘kültür’は生活様式、教養、洗練さ等を含意するものであろう。ドラマの中で描かれる生活様式の相違として、家の中で靴を脱ぐ、年長者の手の甲に敬意を表してキスする、礼拝する、食事時、パンをスープに浸して食べる、ひまわりの種を食べながらのテレビ視聴等、現在もよく目にするトルコ家庭のいわば原風景が富裕層からは文化相違の対

象として取り上げられる。

ドラマは別の視点からもこの文化の相違、文化侵害の場面を映し出す。フェリハが真実を告白したエミル宛の手紙を目にしたエミルの母親が、フェリハ宅に土足のまま、乗り込んでくる。教養、洗練さを問うならば、相異なる文化に上下がないこと、互いに侵犯すべきではないことを感じさせるシーンであった。

トルコでは家の中で靴を脱ぐのが通常である。日本では、湿気の多い気候条件、衛生上等の理由で家の中では靴を脱ぐが、トルコでは、外の穢れを家に持ち込まないというイスラム教の考えから、靴を脱ぐと考えられる。ここからも、イスラム教に端を発するものは極端に排除し、欧米スタイルを模倣するものとして富裕層の生活スタイルが描かれているといえる。

ゼヘラが掃除に出かける家の一つに、大学教授の息子（未婚）と、その母親の二人暮らし宅がある。富裕層に属するが人情にあふれ、掃除婦たりとも見下したり、上から目線で話したりはしない。この教授宅では、トルコの伝統的生活スタイルである二足制が保持されている点も注目値する。彼らもトルコ社会の中庸に位置するといえよう。

8. 日本の恋愛ドラマとの比較

8.1. 金銭至上主義

日本では社会格差が広がっているものの、いまだ多くの方が、横並びの中流意識を持っており¹⁰、貧富の差が最大のテーマとして取り上げられることは少ない。困難な愛をテーマとしても、それは体の不自由な人との愛¹¹、不倫愛等であり、貧富を超えた愛は今どきめずらしいテーマといえる。『花より男子（だんご）』¹²（2005年、TBS）は、その意味で、昨今の日本のドラマのテーマとしては珍しい。そもそも中流意識の強い日本で、「ブルジョワ」「一般ピープル」という用語が現実にはそぐわない浮き立った印象であるが、この貧富の構図ゆえに、海外の若者層には共感しやすいテーマであり、海外でも人気を博したといえる。『リッチマン、プアウーマン』¹³（2012年、フジテレビ）も海外でよく見られる日本のドラマであるが、題名のリッチ、プアは、経済的な貧富というよりも、能力の貧富に焦点がある。

日本の恋愛ドラマでは、「カネ」を露骨に描くことは避けられる。日本社会が「金銭至上主義」を忌避するためであろう。『リッチマン、プアウーマン』のヒーローの、「カネではなく、世の中をよくするものを作りたい」というセリフや、「一流」というものに一切興味を示さない生き方にも反映される。また、ヒロインも決してカネ目当てではなく、仕事ができる男性への尊敬、あこがれ、そばにいて力になりたい、との思いが強く描かれる。

『花より男子』も、有名私学に娘を入学させた母親の意向はともかく、ヒロインは相手を経済的理由からではなく、純粋な恋心からあこがれる。ドラマは、転学した私立校の女子高生たちが、高価なブランド物の時計やバックを身に付けている実態に驚き、呆れる主

人公の独り言からはじまるが、ここにも明示される。

一方、トルコのドラマでは、「金銭至上主義」が色濃く映し出される。「検事になって力があると思っているかもしれないが、本当の力はカネだ¹⁴」といったセリフに露骨に表出される。ドラマの中でも、一般的に社会的地位の高い職業と考えられる「検事」「医師」「弁護士」といった職業従事者が、より高い経済力をもつ会社オーナー等の下に位置付けられて描かれることが多い。

2012年トルコドラマ視聴率ランキング¹⁵で第2位の『Fatmagül'ün Suçu Ne?』は、レイプに遭った女性が、カネの威力で丸め込もうとする被告家族たちに、法の裁きを挑む社会派ドラマであった。第5位に『フェリハ』がランクインしている。第7位の『Hayat devam ediyor』は、田舎から大家族で都会イスタンブールに移住した家族の貧困との闘いを描いたものであった。第8位の『Yer Gök Aşk』は、富裕層の住み込み家政婦の姪が、雇用主の息子と結婚するまでの戦いを描いた恋愛ドラマであった。高視聴率のドラマの約半数が持てる者と持たざる者の対立軸のもとドラマが展開されている。トルコ社会が経済問題に多くの関心を寄せていること、時代の深層心理が投影された結果といえるであろう。

8.2. 親（家族）の存在感

日本の恋愛ドラマでは、親の存在感が薄く、その影響力も少ない。二人の男女と、同世代の友人たちが主な登場人物である。恋愛は当事者同士の問題として進行する。しかし、トルコの恋愛ドラマでは、親の存在が常に付きまとう。親、家族を含めてドラマは進行する。決して二人の自由意志によるドラマ展開とはなりえない。概して保守派ムスリムは子への干渉度が強いが、世俗派でも境界を越えての恋愛となると、親の干渉は避けられない。

『東京ラブストーリー』（1991年、フジテレビ）は、初めて海外でもファンを獲得した日本のドラマである。東京育ちではない、上京した人物を描写するドラマは当時なく、このドラマの後、恋愛と仕事を求めて上京する女性を軸とするものが多くなったという¹⁶。

一方、トルコのドラマでは、両親（親）が仕事を求めて田舎から都会イスタンブールへ移住して来たとの設定が多い。例えば、『Yaprak Dökümü』（2006年、Kanal D）、『フェリハ』、『Hayat devam ediyor』（2011年、ATV）、『Fazilet Hanım ve Kızları』（前述）など列挙される。イスタンブールでの都会生活、欧米の影響を受けた富裕層の暮らしを垣間見、二つのカルチャーショックを経験することになる。この相違からも、トルコの恋愛ドラマは家族との関係を抜きにして語り得ないことが推察できる。

結語

『フェリハ』は単なる恋愛ドラマではない。政教分離政策をとって近代化を進めてきた現代トルコ社会の諸相、都会と田舎、保守派ムスリムと欧米志向の世俗派トルコ人、親世代と若い世代の生き方、考え方が混在した現在トルコの諸相をとらえたものといえる。また、トルコの伝統的社会と世俗派社会の確執、その両社会に生きる世代の葛藤が描かれて

いる。イスラム教を基盤とする伝統的社会が変化を余儀なくされつつあること、一方で欧米の影響を受けた世俗派社会も負の側面を多く抱えており、諸手を挙げて受け入れることはできない。伝統社会に生きる一人が、「彼ら（世俗派社会に生きる人々）は、自らの国（toprak）を知らない」と嘆くセリフも印象的である。

『フェリハ』に込められたメッセージは何か。第一に金銭至上主義に対する警鐘であろう。第二に、古き伝統的な生き方にも道理があること、第三に、人の価値は、外見や所有物ではなく結局内実で決まる、という点ではなからうか。『フェリハ』の主演はフェリハ一人ではない。エミルに並び、フェリハの母ゼヘラ、そして父ルザも主演とされている。この点からも、ドラマが何を描きたかったのか窺い知れる。

概して、トルコの若者層は富へのあこがれが強い。貧しい家庭に育った者は、貧困からの脱却、経済的な上昇を願い、女子であれば「玉の輿」に乗ることを夢見る。しかし、ドラマに描かれる富裕層は、決してあこがれの対象、夢の世界としてだけではなく、潜在する、さまざまな負の側面も取り上げられる。カネの威力でうつつを抜かした不倫の果ての配偶者との不和、離婚、両親からの希薄な愛、絆の無さ、問題を起こしても、すべてをカネで解決しようとする親への憤り、カネで万事解決できるわけではないこと、どんなに立派な「家」があっても「家庭」がなければ人は孤独であること、富があっても愛なき家庭で育った子は、貧しき家庭の子よりも不幸であること、家族のつながり、絆は貧困層のほうがより強いこと、ドラマでは、富と愛の二者択一を迫られても、富を捨て、愛を選ぶ姿が描かれる。

参考文献：

- 阿部孝太郎（1997）「テレビドラマの構造分析・序説—その方法と意義を中心に」『マス・コミュニケーション研究』No.50.
- アリサ・フリードマン（2016）「日本のテレビドラマに見る女性のライフコース」『新領域・次世代の日本研究』国際日本文化研究センター.
- 岩男壽美子（2000）『テレビドラマのメッセージ—社会心理学的分析—』勁草書房.
- 上野千鶴子（1985）『構造主義の冒険』勁草書房.
- 宇佐美毅（2012）『テレビドラマを学問する』中央大学出版部.
- NHK 放送文化研究所（2004）『現代日本人の意識構造 第6版』日本放送出版協会.
- 西別府厚子・岩男壽美子（2006）「テレビドラマの社会心理学的研究—内容分析を中心として—」『武蔵工業大学環境情報学部紀要』No.7：79-89.
- 盛山和夫（1990）「中意識の意味」『理論と方法』5(2)：51-71.
- 四方田犬彦（1995）『映画はついに100歳になった』日本放送出版協会.
- Fiske, J（1990）“Introduction to Communication Studies (2nd edition)” (Routledge).
- Kızılay, M（2009a）「日本語とトルコ語における『話すこと』に関するある諺及び慣用語の対照研究」『比較文化研究』No.86：125-134.
- （2009b）「日本語とトルコ語における『結婚』に関する諺の対照研究」『ニダバ』No.38：98-107.
- （2009c）「日本語とトルコ語における『親と子』に関する諺の対照研究」『比較文化研究』No.87：27-37.

¹ 西別府・岩男 2006：79.

² 「構造主義は社会フロイディズムである」という主張（上野 1985, Fiske 1990）、つまりフロイトの夢

分析と同じように、物語・神話の分析はその社会成員の無意識の部分を表象している、とよくマッチするという。(阿部 1997: 128.)

³ 一話の放送時間はコマーシャル抜きで1時間半から2時間、時には2時間を超過することもあった。

⁴ 一例として『Adını Feriha koydum』の続編として、2012年9月から『Emir'in Yolu』(Show TV)が放送されたが、主役のうち2人がドラマから離れ、役者が交替したことが原因で視聴率が低迷し、3か月後には放送中止となった。より短命で終わるドラマもある。

⁵ アラブ諸国、ブルガリア、パキスタン、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、ルーマニア、アフガニスタン、スロバキア、イラン、ウクライナ、カザフスタン、セルビア、モンテネグロ、インド、ペルー、ウルグアイ、コロンビア、リトアニア、チリ、プエルトリコ、アルゼンチン、パラグアイ、メキシコで放送された。

⁶ フェリハの双子の兄であったか弟であったかは不明。本稿では便宜的に兄と記述する。

⁷ イスラム教の信仰の根幹にある六信の一つ。

⁸ ただ母親は教育を受けた後の職業、キャリアは眼中にはない。運命は大学という場から生じると信じる。

⁹ 『デジタル大辞泉』2017小学館。

¹⁰ 2003年に統計数理研究所が行った「日本人の国民性調査」の結果によれば、自分の生活レベルを日本の社会全体でみたときに、「上」に入ると答えた人の割合は1%、「中の上」は10%、「中の中」は57%、「中の下」は25%、「下」は4%となっている。このことは、国民の9割を超える多数の人々が「中流意識」をもっていることを示している(NHK 2004: 153)。また、日本人の中流意識の強さについて、盛山(1990)は、「生活水準『中イメージ』の断続的变化説」を唱え、以下のように述べる。「人々は自らが属する階層への意識を判断する判断基準が大きく変化しないまま高度経済成長によって生活水準が上昇したことにより、実際は低収入のままの人でも中流意識を持てるようになった。その結果、経済的事情と意識の関連の結びつきが弱まり、経済事情が低下しても意識は中流のまま、漂い続けている」。

¹¹ 『愛していると言ってくれ』(1995年、TBS)、『星の金貨』(1995年、日本テレビ)、『Beautiful Life～ふたりでいた日々～』(2000年、TBS)、『オレンジデイズ』(2004年、TBS)など数々ある。

¹² 2005年ドラマ視聴率ランキング第4位、続編の『花より男子2(リターンズ)』(2007年、TBS)は、2007年ドラマ視聴率ランキング第3位である(ビデオリサーチ社、関東地区データによる)。

¹³ 2012年7～9月期ドラマ平均視聴率ランキング第3位である(同前)。時価総額3000億円のベンチャーIT企業の若手社長と、東大生ながら折からの就職難で内定ゼロの就活女子の恋愛ドラマ。

¹⁴ 『Meryem』(2017年、Kanal D)、第1話中のセリフ。

¹⁵ 出典: SBT Analiz şirketi 'kanalların 2012 yılının ilk altı ayına ait reyting performansları' (2012年前半期視聴率ランキング)。

¹⁶ フリードマン 2016: 113-125。